

二〇一九年度イタリア文化関連の講演会

報告 小久保真理江

今年度には総合文化研究所の主催・共催により東京外国語大学にて四つのイタリア文化関連の講演会を開催した。そのうち二〇一九年六月二十七日の講演会「Il futurismo e le donne: pregiudizi e correttivi, teoria e mito nelle prime fasi del movimento d'avanguardia (1909-1918) (未来派と女性——アヴァンギャルド運動初期の偏見と修正、理論と神話 (一九〇九—一九一八))」については本号に横田さやか氏からの報告があるため、ここではその他の三つのイベントについて報告する。

・ Leonardo, il paesaggio e la Grazia (レオナルド、風景と優美)、二〇一九年五月二三日、講演者：ラッファエーレ・ミラーニ (Raffaiele Milani)

ボローニャ大学教授で美学を専門とするラッファエーレ・ミラーニ氏が、レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画における風景と優美についてイタリア語で講演した。ミラーニ氏はまず、《サント・マリア・デラ・ネーヴェの風景素描》《岩窟の聖母》《モナ・リザ》《聖アンナと聖母子》などのレオナルド作品に描かれている風景に注目し、自然に対するレオナルドの科学的探求と美

的感性との関係性について論じた。たとえば、《聖アンナと聖母子》の地層の描写は、レオナルドの地質学的な関心や知識を反映しており、レスター手稿における川の流れと地質に関する説明とも合致している。さらに《ジネヴラ・デ・ベンチの肖像》の巻き毛に水の渦のモチーフが見られることにも言及し、自然に対するレオナルドの関心が風景描写のみならず、人物描写にも表れていることを指摘した。こうした絵画作品や手稿の分析を通してミラーニ氏は、自然に対するレオナルドの科学的探求が彼の「優美 (grazia)」の概念や表現にも大きな影響を与えたことを示した。

・ 第七回文学の移動・移動の文学、二〇一九年七月二四日、講演者：フランチェスコ・エウジエニオ・バルビエリ (Francesco Eugenio Barbieri)、和田忠彦

講演会の前半では、カタリーニア大学ラグーサ校の講師で比較文学を専門とするフランチェスコ・エウジエニオ・バルビエリ氏が「Glocal dimension and narrative transportation in the “global novels” of Murakami Haruki and Elena Ferrante (村上春樹とエレナ・



フェツランテの「グローバル小説」におけるグローカルな性質と物語への移入」という題の講演を英語で行った。バルビエリ氏はまず、アダム・キルシュ (Adam Kirsch) の著書『*The Global Novel: Writing the World in the 21st Century*』を取り上げ、「グローバル小説」の概念について論じた。その上で、村上春樹とエレナ・フェツランテがともにグローバル小説の代表的な作家として扱われていることに注目し、「グローバル小説」という視点から両作家の小説作品の特徴を比較分析した。具体的には、両作家について複数の共通点を挙げた上で、村上春樹の『1Q84』とエレナ・フェツランテの「ナポリの物語」シリーズに混在するグローバルな要素とローカルな要素について論じ、こうした「グローカル (glocal)」な性質が世界の読者を魅了し、読者の「物語への移入」を助けっていると指摘した。

講演会の後半には、東京外国語大学名誉教授の和田忠彦氏が、「翻訳という交通路——須賀敦子とタブツキ」という題の講演を日本語で行った。和田氏は、須賀敦子とアントニオ・タブツキの接点や共通性について「翻訳」というテーマを軸に論じた。二人のつながりは須賀がタブツキの訳者であることだけにはとどまらない。和田氏は、タブツキが谷崎潤一郎について論じた一節を引用した上で、『*陰翳礼讃*』の谷崎の原文と須賀のイタリア語訳を比較し、イタリアでの日本文化・文学の翻訳・紹介において須賀が果たした役割の重要性に光を当てた。さらに、須賀の言葉とともに中井久夫の言葉を引用しながら、須賀の「仲介者」としての特性や、翻訳者としてのタブツキとの共通性について論じた。そのなかで、須賀とタブツキがともに複数の言語の間を行き来しながら生きたことに触れ、二人が翻訳

という行為を通して自らの文体を練り上げたことや、須賀の日本語やタブツキのイタリア語にはそれぞれが行き来していた別の言語が浸透していることを指摘した。

・L'America raccontata dagli scrittori italiani (イタリアの作家たちが語ったアメリカ)、二〇一九年十二月五日、講演者：ラウラ・デイ・ニコラ (Laura Di Nicola)、小久保真理江

講演会の前半には、ローマ・ラ・サピエンツァ大学准教授のラウラ・デイ・ニコラ氏が、「Calvino e l'America (カルヴィーノとアメリカ)」という題の講演をイタリア語で行った。二十世紀イタリア文学を専門とするデイ・ニコラ氏は、ローマ・ラ・サピエンツァ大学のカルヴィーノ・ラボラトリの運営責任者でもある。本講演会でデイ・ニコラ氏は、カルヴィーノの講演原稿、書簡、日記、インタビュー、小説作品などさまざまな資料を引用しながら、カルヴィーノとアメリカとの関係について論じた。特に、パヴェエーゼやヴィットリニを通してアメリカ文学を吸収したカルヴィーノが、その後アメリカ滞在の実体験を経てアメリカとどのように関わり、アメリカについてどのように語ったのか、そしてアメリカ滞在経験からどのような影響を受けたのかが中心的に論じられた。

デイ・ニコラ氏はカルヴィーノがニューヨークの街に特別な愛着を抱いていたことに注目し、そのことがキューバ生まれの作家カルヴィーノ自身のコスモポリタンな側面や複数のアイデンティティの意識と関係している可能性を示唆した。また、

一九五九年から一九六〇年にかけてのアメリカ滞在期間にカルヴィーノが、日記や友人への葉書・手紙など複数の媒体でアメリカについて書いて書いていることに言及し、そこにはアメリカについて書くことを通してアメリカを理解したいという強い願望が見られることを示した。また、『マルコヴァルドさんの四季』や『見えない都市』などのカルヴィーノ作品のなかでニューヨークのイメージが表れる部分を引用し、ニューヨーク滞在がその後の創作活動に与えた影響についても論じた。

さらにカルヴィーノがエイナウデイの編集者としてアメリカ文学を紹介する役割を担ったことに触れ、その編集の仕事からもアメリカとの関係を論じうることを示した。また、カルヴィーノの書棚に数多くのアメリカ文学作品があり、それらの本に書き込まれたメモからカルヴィーノとアメリカ文学の関係について論じうることも指摘した。

講演会の後半には本報告文の執筆者である小久保真理江が「L'America di Pavese, Calvino ed Eco (パヴェーゼ、カルヴィーノ、エーコのアメリカ)」という題の講演をイタリア語で行った。この講演では、世代の異なる三人の作家がアメリカ文化とどのように関わり、アメリカ文化についてどのように語ったのかを論じた。この口頭発表の内容を日本語でまとめ大幅に加筆した論考「アメリカへのまなざし——パヴェーゼ、カルヴィーノ、エーコ」が本号に論文として収録されているため、詳しい内容については拙著論文をご参照いただきたい。